

---

# 龍青の建国記

三日月の騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍青の建国記

### 【Nコード】

N0761T

### 【作者名】

三日月の騎士

### 【あらすじ】

この国は、くさっている。政治家たちが、地位の向上を求めて醜い争いをしたり、カづくでおさえつけたり……。そんな国を潰そうと、武術団に所属している、龍青が仲間を連れて、国の軍隊に立ち向かう！しかし、それまでに龍青をねらう、多くの敵をたおさなければならなかった……。

## プロローグ（前書き）

まだ読まないでください。

## プロローグ

『うん』

『お父さん！』

『龍青リウセイ』

『お父さん！しっかりして！』

『龍青……ごめんな……お父さん……もう死ぬ……かもし  
れん……』

『そんなこと言ったらだめだよ！お父さん！』

『龍青……よく……聞け……』

『……うん』

『お前に……この……手帳を……あげる……明日に  
なったら……この手帳に……番号が……書いてある……か  
ら……電話……しろ……』

『お父さん……』

『大……丈夫……だ……お前を……保護……してく  
れ……るか……ら……』

『死んじやだめだよ！お父さん！しっかりし』

『龍青……覚えて……おい……てくれ……』

『……うん』

『お父さんが……お父……さんが……この……国の……  
……刺客……に……殺され……た……というこ……  
……と……を……』

『お父さん……お父さああああん！』

『《ガクッ》』

パチッ

その叫び声と同時に、俺は目を開けた。

・・・夢か。

「んんー」

目を覚ますため、腕を伸ばす。そして、空を眺めた。

清々しい青空の中で、白熱電球のように、輝き続ける太陽。

新緑の葉っぱたちで隠されているが、太陽の光は、葉っぱたちの隙間を通り、俺の目に、はいつてくる。

しかし、葉っぱたちのおかげで、木陰ができるので、少し涼しくなっている。

風が、俺の髪をそつとなでた。

・・・それにしてもいやな夢を見た。まさか、あの過去の出来事が夢になって、出てくるなんて。

俺の父さんは、今から3年前、ちょうど5歳のときに、銃殺された。父さんを殺したのは、国の刺客だった。

父さんは強かった。どこかの武術団の隊長を、務めていたらしい。いつも、弱い人たちを守るために、戦っていた。

しかし父さんは、強すぎたため、国から危険視され、殺された。所属していたどこかの武術団が、この国を潰そうとしていたから

だ。

今、この国の政治家は、腐っている。

自分たちに、味方をつけるため、外国の言いなりになる。

地位を護るため、優秀な人材に、濡れ衣を着させる。

震災などが起きたら、責任はだれにあるのか、言い争う。

こんな政治家たちがいるから、武術団などが、国をつぶそうとしているのだ。

だが、国の政治家も、馬鹿ではない。

武術団の反乱にそなえて、自衛隊のほかに、能力者だけを集めた、最強の軍隊を結成させた。

それによって、武術団も、うかつに手を出せなくなってしまった。

武術団に入れるのは、12歳から。俺は、そこに入るため、修行をしている。

武術団に入る理由は2つ。

この腐った国を潰すため。そして

父さんの敵を討つため・・・

まあ、でも今は休憩中だし、師匠が来るまで寝ることにしてよ。

俺は、木陰の下で、また眠りに就いた。

## プロローグ（後書き）

いかがでしたか。

次から、本編です。楽しみにしてください。

それから、今、多忙なので、投稿は、1ヶ月に1回くらいになるかもしれません。すいません。

まあ、そんなことは、おいといて、

龍青 作者「次回もよろしく!!」「」

なんで龍青が出てくんのだああああ!!!!

第1話 龍青、休憩中（前書き）

いやー、暇だったから早く仕上がりました。

今回、書いてて気がついたんですけど・・・

これ、プロローグにした方がいいような・・・

第1話 龍青、休憩中

【 30分後 】

『おーい。龍青』

遠くから、誰かの声が聞こえた。  
いったい誰だろう。

そう思いながらも、俺は目を開けない。

そりゃそうだ。昨日、深夜2時まで起きていたからな。しかも起きたのは、6時。8歳の子供にとっては、かなりしんどい。

理由？それは、ジャップのアルティ○○トスターをしていたからだ。

あれ意外と面白いんだよなー。け○しんの6コマ、強すぎるし。

あと、ブ○ーチのい○ご(○解)の7コマも。

なんで、あれがもう一度、流行しないんだろう？

そんなことを考えていると、

《 ヒュー 》

遠くから、かすかに音が、聞こえてくる。  
なんだろう。一体。

俺は、今まで閉じていた目を、開けた。そして、あたりを見回す。  
どうやら、前方から何かが、飛んでくるようだ。  
俺は、目を細めた。

10メートル先に黒い物体が……って、あれってまさか、ク  
ナイ!?

「うわああ!」

顔に当たるすれすれで、よけた。

ふう、危ない危ない。あと1秒遅れてたら、あたるところだった……。

で、何が飛んできたのだろう。

俺は、確認するため、後ろに振り向いた。

樹に深々と、食いこんでいる、黒いもの。

……これ、本物のクナイだ。

って、俺よけてなかったら、どうなってたんだよ！赤いもんブツ  
シヤアアア！？噴水のように！？

っーか、誰だよ！？これ投げ<sup>クナイ</sup>てきたの！？俺、危機一髪だったよ  
！？

・・・まあ、いつもだったら、草の根を分けてでも探してるとこ  
だが、今は、寝ることを優先しよう。あと1時間くらい。

俺は、後ろの樹に刺さったクナイを抜いた。  
そして寝転がろうとした寸前、

「いつまで休憩しとんじゃあああ！！」

「ぐふおおお！？」

突然現れた男に、俺は、アッパーを食らわされた。

第1話 龍青、休憩中（後書き）

アップーを食らわせたのは誰か！  
それは、次回で！

## 第2話 龍青、師匠と対面す

「ガハッ」

数秒前にされた、アッパーの痛みには耐えきれず、俺は、地面に付いた。

くそっ、むっちゃ痛えじゃねーか！誰だ！？こんなことしたの！？

「まったく、本気でやられなかったことに感謝しろよ」

ため息混じりに誰かが言う。

この声、まさか……！

「か、かげみや影宮師匠……」

「やっと気づいたか」

やはりそうだったのか。こんな真似をするのは、師匠しかいない。

影宮師匠は、30代くらいの男で、鋭い目つきに、ツンツン頭が特徴だ。顔立ちが整っているから、所属している武術団の女性陣から、かなりもてている。それに、顔が、死んだ俺のお父さんにそっくりだ。だから、最初はよくお父さんと間違えていた。

「まったく。時間も守れないなんて。お前、本当にやる気あんのか？修行」

「う……。す、すみませんでした……」

どうしてクナイを投げたのかとか、なぜアッパーをくらわして起こしたのかとか、聞きたいことはあるが、とりあえず謝っておく。一応、悪いのは俺だし。

すると、師匠が疲れた顔で、俺に愚痴り始めた。

「まったく、俺がお前を起こすのにどれだけ苦労したことか。必死でクナイの刃を砥いだり、拳を固めたり、穴を5メートル掘ったり」

「師匠。人を起こすのに、そんな苦労しなくても大丈夫です」

軽くたたいて起こすとか、他の方法が考えられなかったのかなあ。

「まあ、そんなことは置いといて」

置いといていいことじゃない。よけてなかったら、俺の命が危なかったから。

「今から、修行を再開する。今までとは違って、特別な事をする」

ゴクリッ

その言葉を聞いて、思わずつばを飲み込んだ。さて、業の練習だろうか。

## 第2話 龍青、師匠と対面す（後書き）

龍「おい、作者」

作「なんだ？」

龍「さすがに短すぎるぞ」

作「し、仕方ないじゃないか。勉強で忙しいんだし」

龍「それでもこの短さはないと」

作「毎回、短くてすいません。これからは、なるべく長く書くように、しようと思います」

龍「うそ！？無視！？」

## 第2・5話 業とは？

突然だが、これから業について説明しよう。

業とは、生まれつき、何らかの能力を持っていないと、できないものである。そして、敵と戦うのに、必ず必要である。その種類は数えきれないほどあり、炎や雷を操る業や、武器を使った業など、様々である。

業を発動すると、体力が消耗する。そして、体力が尽きると、業が出せなくなる。出した後しばらくたつと、出す前の体力に戻る。尚、消耗の大きさは、業の強さで決まる。

業は、4つの種類に分類することができる。

「業」、「破業<sup>やぶり</sup>」、「解業<sup>はなす</sup>」、「奥義」の4つだ。

これから、それらについて説明しよう。説明だけでは分からないかもしれないので、例として、ワ〇ピースのル〇イをあげてみよう。

業・・・業全体の中でも基礎となり、体力をあまり使わないもの。

ほとんどの技がこれに分類する。

敵と戦う時に出す技の、7割を占める。

中には、奥義に匹敵する威力を持つものもある（その場合は、体力を結構使う）。

例 ゴムゴムのピ〇トル、鞭 e t c

解業<sup>はなぢ</sup>・・・業を強化させるもの。

これを発動し

ているときは、体力が少しずつ減少する。

複数の解業は、出せない。  
破業<sup>やぶり</sup>で確実にとめられる。

止められた後

は、1時間強たたないと出せない。

例 ギ○2 e t c

破業<sup>やぶり</sup>・・・業の中でも、そこそこ強いもの。

解業の発動を、確実に止めることができ

る。

例 ゴムゴムの暴○雨 e t c

奥義・・・能力者が発動する技の中でも、体力をかなり消耗させる、もっとも強い業。

解業の発動を止められるものもある。

連続では出せない。

例 巨人の銃○射 e t c

この4つ全てをマスターするのは、かなり難しい。相当な努力がいる。

しかしできたら、かなり強くなれる。

俺は、そのために今、必死になって修行しているのだ。

・・・普段の生活は置いておいて。

## 第2・5話 業とは？（後書き）

龍「作者!!!」

作「なんだい？」

龍「前回も言ったと思うが、本当に短いぞ！」

作「何話か見てみな」

龍「えつと・・・2・5話、か？」

作「そうだ。これは2と3の間だ。次の3話は長いと思うぞ」

龍「そうかー。じゃあなぜ短かった2話に含めなかったんだ」

作「・・・・・・・・・・」

龍「おい、聞いてんのか」

作「・・・ああ！聞いていたさ！」

龍「じゃあなぜだ」

作「えつとー・・・ほら、やっぱりさ、いきなり話が変わったら、読者が困るかなーって」

龍「ほんとうは？」

作「思いつかなかった」

龍「・・・やっぱり」

作「し、仕方ないじゃないか！1カ月に1回は、投稿するって言う  
ちやったし！」

龍「じゃあ2カ月でいいじゃねーか」

作「大人までには終わらしたいんだ」

龍「地味におよその年齢、暴露しているよ・・・コイツ」

作「ふ、俺はまだピチピチの10代なのさ」

龍「それは俺もだ！てゆうか、まだ届いてねえ！」

作「まあ、こんだけ話しておけば大丈夫だろ」

龍「これは策略かよ・・・」

作「次回はついにシツモンコーナー開始！」

龍「なんで片言なんだよ・・・で、誰から受けたんだ、質問？」

作「もちろん僕さ（キラッ）」

龍「自問自答かよ！・・・！」

### 第3話 龍青、修行を始める

「ここかよ……」

修行のためにやってきたのは、ここら辺の人達が、恐れて近寄らない場所。

その名も、『狒々の森』。

静寂につつまれた森。

その雰囲気を、他の場所に漂わせまいと、左右に広がる岩山。

先が見えないくらい濃くかかる霧。それを、太陽が照らし、より際立たせる。

21

この静寂で不気味な雰囲気が、恐怖心を与えるのだろう。  
俺はそう思った。

「さてと、修行を始めるか」

師匠が俺に言う。

……でも、こんな気味悪い場所でやるのは、ちょっと……なんというか……ひくよね……。

ダメだ！こんな弱腰になったら！俺は、お父さんの敵を討つんだ！この修行、どうってことない！

「お前は今から」

ドーンと来い、師匠！俺はやってやる！どんな難しい課題でも！

「この森に生息する熊を20体倒せ」

この森の熊 Ⅱ 凶暴で、木を簡単になぎ倒す Ⅱ 最強 Ⅱ  
会ったら俺、即死

「おい、龍青。さめざめと泣くな」

いや、普通泣くって！この状況！死が目の前に近付いているのに！  
そんな俺を見て、師匠は、はく、とため息をついた。そして、めんどくさそうな顔をして、俺に告げる。

「仕方ねーな・・・じゃあこの森を抜けるってのはどうだ。安全は保障しねーが」

最後に付け加えられた言葉はどうかと思うが・・・でも、  
20体倒すよりかはマシだ。提案をのもう。

「わかりました。そうさせてもらいます」

「ああ、頑張れよ」

とにかく、これで難を逃れられた。やっぱ、プライドより自分の命だよ

俺は、入口へと案内する師匠についていった。よし、がんばるぞ！

・・・ん？までよ・・・。よくよく考えてみたら、この森の距離はかなり長かったような・・・。

疑問に思った俺は、師匠に聞いてみた。

「師匠」

「あん、どうした」

「この森の距離は、どれくらいですか」

「えっと、確か、20?くらいだったな」

ダッ (身をひるがえして逃げる俺)

ガシッ (腕をつかむ師匠)

「どこに逃げる。龍青」

「俺を殺さないでください！師匠！」

逃げようとした俺を、師匠が止めた。

くっ・・・なんて理不尽なんだ！20kmっていくらなんでも無茶だ！

そんな俺の気持ちを一切考えず、師匠は告げる。

「そう簡単に逃げようとするな。たかが20kmだ」

「たかがでは通用しませんよ。それ」

確か20kmって、東京からさいたま市の距離だったと思うが。

「それに、お前の業は、ここが一番発揮しやすいからな」

師匠が俺に言う。

よく考えたら、確かにその通りだ。この薄暗い場所は、俺が使う

業にとって好都合だ。

俺が使う業は、『影』。

『影』は、自分を中心に半径5m以内の影、または闇を具現化させて攻撃する業だ。

この業の威力は、影、または闇の量と濃さで決まる。つまり、光があたらない真つ暗な洞窟では、最も威力が強くなるということになる。

だから、木陰ができるここは、この業を出すにはうってつけのころだ。

・・・でもやっぱり、20kmはきつくね？

そう思っていたら、師匠がこんなことを言ってきた。

「そうだ。この修行を終えたら、なんかおごってやってもいいぞ」「えっ、ほんとうですか!？」

「ああ」

「うな重でも？」

「ああ。いいぜ」

「マジで!この師匠が!？」

こうしちゃいられない。すぐ出発だ!

「では、頑張ってください。師匠」

「しっかりやってこいよ」

俺は、満面の笑顔のまま、ここ、『狒々の森』の深くへと、入っていった。

### 第3話 龍青、修行を始める（後書き）

こんにちは。作者の三日月の騎士です。お知らせがあります。たったの1文だけです。見ておいてください。失礼かもしれませんが、ご了承ください。

8月から3月までは、作者の都合のため、投稿しません。

#### 第4話 龍青、熊に出会う(前書き)

こんにちは。三日月の騎士です。前回の連絡事項は、本当です。1章は今月じゅうに終わらすつもりなので、よろしくお願いします。

#### 第4話 龍青、熊に出会う

入っていくにつれ、周りは暗くなっていく。先が見えない。木陰と霧のせいだ。下手したら迷ってしまっただろう。

しかし、俺は奥へと進む。どんどん暗くなる。それでも俺は身を翻さず、前へ前へと足を運ぶ。どんな危険が待っているだろう。そう、すべては業のため、そして、食欲のため。

よし、やってやる！食べ物、うな重が俺を待っている！

そんなことを考えていたら、目の前が暗くなった。一瞬にして。俺は走りながらも顔を上げる。そこには、体長2メートルくらいの動物がいた。

熊だ。

思わず立ち止まる。これが、噂の凶暴な熊か……。

熊は、「グオオオオオオ！！！」と雄たけびし、威嚇するように俺をにらみつける。普通なら、逃げる。

しかし、俺は身を構える。攻撃の態勢に。俺には、食べ物がかかっているんだ。うな重がかかっているんだ。こんな奴、どうってことない！

そんな俺の気持ちを察したかのように、熊は、少し退く。下手に近付いたら逆にやられると、思ったのだろう。

……残念だったな。

俺は、自分の拳に影を集める。その時、地面に映っていた、半径5m内の影が一瞬にして消える。そこだけ、日に照らされているように明るくなった。そして、熊は、その中にいた。

いける・・・！！

「【影打ち】！！」

そう叫んだのと同時に、俺は、熊に影でできた拳を叩きこむ。集まっていた影が放たれ、熊の腹にめり込んだ。そのあと、

ズシイン

地響きが起こるくらいの音を立て、熊は仰向けになって倒れた。俺は、恐る恐る近づいていく。熊は泡を吹いていた。どうやら、戦闘不能のようだ。

・・・あれ？やけに熊弱くない？師匠いわく、業の基本となる、【影打ち】で倒せるなんて・・・。

その時、師匠が言っていたことを思い出す。

『この熊は、最低でも5メートルはある。まあ、子供を抜いては、な』

確か、さっき倒した熊は2メートルほどだった。ということばかり、まだ子供だった熊を倒したことになるのか。

それは悪いことをしたな……。二度とそんなことが無いように気をつけよう。

そう思っていると、急に視界が暗くなる。さっきより暗い。まるで周りが闇に包まれたように、て。

え……？ま、まさか……。

ゆっくりと顔を上げる。目の前には、空を隠すくらいの巨大な手が、俺に近付いていた。

## 第5話 龍青、危機迫る（前書き）

ついに、ついに来ました。憧れの夏休みです！

いやー、やっぱり学生の楽しみの一つであるこれは、テンションあがりますね〜。

・・・というのが普通なんですが、今年はそんな気持ちにはなれません。なぜかって？それは、学生しか経験できないことが原因です。

その名も、受験・・・。

## 第5話 龍青、危機迫る

え……。何だ、これ……？

巨大な手と俺の間が、どんどん狭まっていく。ゴオオオオオオオオオオという擬音を思い浮かべるくらいの勢いを感じた。

しかし、俺は棒立ち状態だった。何が起こっているのか分からなかった。だが、俺の身体からだが、「避ける」と叫んでいるのはわかった。しかし避けようとしても間に合わない。巨大な手が、もうわずか1メートルに迫っているからだ。一発かけに出るか。でも確実に避けれる方法があるはずだ。思い出せ、思い出せ……！

あ。あつた……。あつた……。

先月覚えた業があつたじゃないか。なんで忘れてたんだ、俺。しかし、あれはまだ完ぺきにはできてなかったような……。って、言ってる場合じゃない！やるしかない！

俺は業を発動する。落ち着け、落ち着け。影と身体からだを1つに……。

次の瞬間、巨大な手が地面を大きく揺らした。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そんな音と同時に、地面が揺らいた。その揺れは、すぐに収まった。

・・・地震か？けど、こんなに早く揺れがおさまる訳がない。とするとやっぱり・・・。

俺は空を見上げる。もう襲われたのかよ、あいつ。運が悪い奴だなあ。

そう思いながらも、俺は心配する。

・・・あいつ、大丈夫か？

巨大な手で男を叩き潰したのは、体長6mの熊だった。地面の揺れが収まる。動きを感じない。そのあと、熊は笑みを浮かべた。また人を殺せた。血をみるのが楽しみだ、と。

そんな思いで、熊は手を地面から離す。その時、熊は驚愕した。

つぶしたはずの男の身体が、揺れ動いていたのだ。

そんな光景を見た直後、後ろに気配を感じる。すざましく、恐ろしい殺気を。熊は即座に振り返った。そして目にした。黒い煙のようなものがたなびいているのを。そして気づいた。

・・・生きていたのだ

つぶしたはずの男が。それも、黒いものを纏って・・・。

「影業」、それは半径5メートル内の影と闇を、具現化させて攻撃する業である。攻撃できる範囲も半径5メートル内で、難易度も高く、そこまで強い業ではないから、この業を使うものは、昔から数えるほどしかいなかった。だから、この業を使っていたものは、強力な業をあみだし、極めた。

その中に、影と身体をからだ一体化させ、単発の攻撃をくらった時、一時的に影と化し、業を発動した場所を中心とした、半径5メートル内のどこかに逃げられる業があった。

その業の名を、【陽炎】という。

**第5話 龍青、危機迫る（後書き）**

今回は、シツモンコーナーをこの欄に書く予定です。

第6話 龍青、熊に挑む（前書き）

シツモンコーナーは、今度にします。

## 第6話 龍青、熊に挑む

### 龍青サイド

まさか、【陽炎】が成功するなんて……。

熊の攻撃をその業でよけた俺は、驚きで頭がいつぱいだった。だって、あの業は難易度かなり高いのに……。自分の才能に酔いしれそうさ。

今そんなことはどうでもいい。熊の背後にまわられて、しかも熊に隙ができている状況。こんなチャンスは滅多に訪れない。俺が今すること。それは攻撃をすることだけだ！

俺は、手に影を一瞬で集める。それを見たか、すでに俺のほうを見ていた熊は巨大な手を握り、真正面にそれを突き出す。地面に足がついていた俺は、即座にかわした。熊にまた隙が出来る。

今だ。

俺は、手に集めていた影を、長さ1mくらいの刀に変形し、具現化させる。この業は、【影打ち】と違って攻撃範囲は、半径1m。リーチは短いが、本物の刀と同じように斬れる。こいつは、子熊と違って打撃があまり効かないだろう。だったら斬撃ならどうだ！

俺は、熊の懐に入ろうとする。それに気づいた熊は、あわてても

う片方の手で俺をつぶそうとする。熊の巨大な手が俺に襲い掛かる。それでも俺は熊に近づく。

今引き返したら、完全につぶされるだろう。【陽炎】をしたとしても、熊は一度経験しているから、何らかの対処をしてくる。だからここは、いちかばちかの勝負だ！

「うおおおおおおお！！！！」

「グオオオオオオオオオ！！！！」

俺も熊も雄叫びし、相手に攻撃を与えようとする。熊の手が接近してきた。

熊の手と俺の間、5 m。懐まであと5 m。

熊の手と俺の間、3 m。懐まであと4 m。

熊の手と俺の間、1 m足らず。

・・・今だ！

俺は、顔を上げる。もう懐には間に合わない。だが、この刀の攻撃範囲内に入っている。それに、こいつの手によってできた濃い影によって、威力が大きくなっている。刀の切れ味と威力は言うまでもない。

そう、俺が狙っていたのは、こいつの手を斬ることだ！

「【影斬り】！！」

俺は、素早く刀を振り下ろし、熊の手の付け根を斬る。骨の硬さを感じなかった。地面に血がしみ込む。俺の頭上では、熊の血が噴水のように噴きだしていた。

熊は、元々手があったところを抑え、苦しんでいた。痛みで声もあげられなさそうだった。

その姿を見て、俺は熊の懐に入り込む。

これも生きるため。うな重なんてどうでもいい。こんなところで死んでたまるか！

走りながらも、影でできた刀をもう一度構える。俺は、熊のわき腹に接近する。さっきとは違って影は濃くない。しかし、今なら正面から攻撃できる。次でとどめだ！

俺はどンドン迫っていく。もうあと5m。あと少し、あと少し。

刀が熊のわき腹にあたる。よし、これで俺の勝ちだ！

と思った時、

「やるじゃねーか、小僧」

と誰かがつぶやいた。え．．．今の声は誰？師匠ではないような．

．．．

そんなことを考えていると、俺の体に、雷に打たれたような衝撃が走る。そして俺の視界から、熊の姿が消えた。

## 登場人物 その1（前書き）

今回は、少し遅めの、登場人物紹介をしたいと思います。シツモンコーナーは、今度します。引き延ばしていつてすみません。

## 登場人物 その1

龍青<sup>りゅうせい</sup>（8歳）・・・身長 130・1cm

体重 29・4kg

特徴 少し長めの黒髪で、目が少し鋭い。

父の、龍が描かれているハチマキをいつも頭に巻いている。

顔立ちは整っている方。父親似。

性格 正義感が強い。少々臆病な一面もある。

業 『影』

趣味 ゲーム（今はジャンプ○○ティメツ

トスターズにはまっている）、将棋

その他 母は早世し、父は3年前、国の刺

客に殺された。

今は一人暮らし。

影宮師匠と修行中。

影宮 治輝<sup>はろひ</sup>・・・身長 178・6cm

体重 70・9kg

年齢 33歳

特徴 ツンツン頭。目つきが鋭い。結構イ

ケメン。

ころは決める。

性格 めんどくさがり屋。でも、決めると

業 『影』 など

趣味 将棋、囲碁、剣道、1人旅

の師匠。

その他 武術団に所属。かなり強い。龍青

ている。

龍が描かれた刀をいつも持ち歩い

## 登場人物 その1（後書き）

最近、スーパーダッシュ文庫の「ベン・トー」にはまっています。今秋アニメ放送決定！！ぜひ、読んでみてください（2011年度、このラノ大賞第5位の作品です）。

## 第7話 龍青、事実を知る

く到達地点にてく

プルルルルルルツ プルルルルルルツ

ピッ

『もしもし、影宮です』

『あつ、もしもし、こちら水朗太すいらうたです。総大将そうだいじょう、ですよね？』

『ああ、そうだ。別に敬語じゃなくてもいいぞ。俺たち、同士だからな』

『そうか。それなら、そうさせてもらうわ』

『すぐに順応したな・・・お前・・・』

『気にすんなよ。そんなこと。って、そんな余談してる場合じゃないんだった』

『どうした。そんな切羽詰きりひぢまって』

『さつき、狒々の森に生息している熊の正体が判明した』

『熊の正体？』

『ああ、そうだ。それで、その正体は実は、先月から探している政府の密偵らしい』

『・・・な、に・・・』

『つまり、俺ら武術団の隊員がこの森で死んだのは、政府の密て  
(プッ)(プッ)』

(・・・くそ、なんてこった！)

影宮は、砂ぼこりが舞い上がるくらいの勢いで走り、ここ『狒々の森』の中に入る。そして、ひたすら走る。龍青がいるところに向かつて。

(くそっ、まさかこんなところに密偵がいたとは・・・！)

影宮は、この付近に政府の密偵がいることは知っていた。しかし、熊に化けているとは考えられなかった。

(そんなことどうでもいい。一刻も早く、龍青を見つけないと・・・！場所が分からないのはきつい。くそっ！あいつに携帯持たしておいたらよかった。)

そんなことを考えていたら、

ドゴオオオオオオン！！

と、何かが発射したような音が聞こえる。影宮は、素早く目の前の木を登る。そして、およそ500m先の岩山が崩れている光景を目にした。影宮はすぐ、あそこに龍青がいると悟った。

そして、影宮は木の枝を頼りに、枝をけって宙を舞う。その動作を繰り返して、龍青がいる場所を目指し、先を急いだ。

「・・・っ！」

そばにあった岩山にぶつけられた俺は、痛みで声が上がられなかった。背中に感覚が無い。何とか目を開ける。すると、目の前には信じられない光景が広がっていた。熊がたばこを吸っていたのだ。そして、

「ふう・・・。やっぱりすわねえと生きていけねえな」

と言う。・・・ん？なんかおかしいな。熊ってしゃべれたっけ？そんなことを考えてたら、熊が、

「お、目が覚めたようだな」

といて、俺の方に向かって歩いてくる。そして、俺にこう告げる。

「わかっていると思うが、俺は熊じゃない。人間だ。それも、政府のな」

俺はその言葉を聞いて、驚きと同時に怒りがこみ上がってきた。

第7話 龍青、事実を知る（後書き）

《 シツモンコーナー 》

Q：この作品は、いつ思いついたのですか。

作：確か小4くらいでしたね。考えて考えた末に、2章から12章まで物語ができましたね。1章はどうなってたんだ！

Q：何章までありますか。

作：今のところ、23章までありますね。長っ！

第8話 龍青、救われる(前書き)

緊急速報!!

1章が終わるまで投稿します!!

## 第8話 龍青、救われる

「政府の人間だと・・・！」

あの優しくて強いお父さんを殺した、政府……。今の俺の頭の中には、その言葉しかなかった。むしろ、それしか考えられなかった。さっきまでの体の痛みが、嘘のようになくなる。

そして、気づけば体が勝手に熊（？）のいるところに近付いていた。まだ残っていた影の刀で、心臓を突き刺そうとしている。だが、また熊（？）に飛ばされた。そして、地面に叩きつけられる。

「だからお前は甘いんだ」

やれやれといった態度で、熊（？）は俺に言う。しかし、俺はさっきの痛みと怒りのせいで、ほとんど耳に届いていなかった。

俺は立ち上がるうとする。もう一度熊に接近したい。斬りつけた。しかし、体が動かなかった。俺にはもう体力が無い。

そんな状況で、熊（？）が攻撃してきた。近づいてきた拳から殺気を感じる。視界が暗くなる。もうダメだ。そう思った時、なぜか視界が明るくなった。

「な、なんだこれは！」

俺の目の前では、熊（？）が巨大な黒い手に腕ごとつかまれ、動きをおさえつけられている。近くから、聞いたことがある声があった。

「・・・【破業 影喰い】」

その声は、師匠そのものだった。

師匠は、熊（？）をそのまま握りつぶす。そのあと、巨大な黒い手は、師匠のもとに戻る。そうか、師匠は自分の手を影化させて攻撃したのか。しかも、業の種類は『破業』<sup>やぶり</sup>。威力は高い方だ。かなりのダメージだろう。

「龍青、無事か」

師匠が話しかけてくる。俺は、はい、と大きな声で返事した。

「……うう、くそっ」

どこからか、さっきの熊（？）の声が聞こえてくる。俺は、素早く攻撃の態勢になる。しかし、師匠が俺の前に手を伸ばす。攻撃するなという合図だろう。

そして、師匠が言葉を紡ぎだす。

「……さすがにお前でもこの業は効いたか。いくら解業<sup>はなむ</sup>で強くなっても、破業<sup>やぶり</sup>にはかなわないからな」

そういった後、師匠は静かに告げた。

「久しいな。国軍中将、林中日熊<sup>はやしなかひくま</sup>、通称『ヒグマ』」

「国軍……！」

俺は師匠から告げられた言葉に驚愕した。

国軍、それは政府の軍隊の通称で、この国の強者を揃えた軍隊だ。

総大将含め、大将10人と中将10人、そして10万人以上の兵士など、総勢20万を超える。つまり、最強というわけだ。対等に戦えるものはいないともいわれている。

っていうか、なんで師匠はこいつ、ヒグマを知っているんだろう。

そう思っていたら、ヒグマが痛めているとは思えないくらい、平然と立ち上がって、師匠と話し始めた。人間の姿になっていた。

「誰かと思つてたらアンタか。あの時以来だな」

「ん、そういえばそうだな。あの時くらいしかいっしょに戦っていないからな」

「まああの時は国の危機だったからな。でもアンタは女のために戦つてただろ」

「そうだったな。ハハハハ」

あの時つて何だ！？つうか、女のために戦うつて、どんな心の持ち主だよ！

## 第8話 龍青、救われる（後書き）

すみません。途中で終わってしまって。あと2話で終わらせようと思っ  
ています。

## 第9話 龍青、一件落着（前書き）

あと一話で一章完結です！まあ1章は序章みたいなもんですからね。短いのは確かです。2章から本格的にスタート！なんですけど、2章は2〜3月まで待っておいってください。お気に入り登録している方、すみません。

## 第9話 龍青、一件落着

「んで、お前がなんでここにいるんだ。それが一番聞きたい」

師匠がいつもとは違って真面目な顔をしている。どうしたんだろ  
う。

「政府の命令さ。ここの土地を見張っておけよと」

「騙されねえよ。もう調査積みだ」

「・・・けつ、知ってんのかい」

「あたりまえだ。お前が密偵だというのはもう知っている」

え！？コイツ密偵だったの！？

「で、目的はなんだ」

師匠が、鷹のように鋭い目でヒグマに質問する。ヒグマは、バレたか、といった感じで答えた。

「アンタ率いる武術団の本拠地の場所を探すことだ。ただ、期間は一カ月。だから今日、俺は軍隊に戻らなければならぬ」

「お前が戻るのは冥土だ」

「・・・ふう、やっぱアンタと勝負しなければならないのか」

張り詰めた雰囲気は漂い始める。も、ものすごく入りづらい・・・。  
これが強者同士の戦いか・・・。  
そんな中で、ヒグマは口を開いた。

「じゃあ、いくぞ」

う……、何という威圧……。まるで地に飢えた狼のようだ。  
俺はさつきこんな奴と相手していたのか……。今の俺じゃ絶対  
にかなわねエ……。！  
そして、ヒグマは俺と師匠に告げる。

「って、んな訳ないっしょ。ほんじゃ、さいなら〜」

ヒグマは、急にさつきまでの恐ろしい威圧をなくし、身を翻して  
逃げて行った。ん……。？あれ？どういう展開になってんだ？

……。ああ、逃げて行ったのか。これこそが、『戦わずして勝つ』  
ってことなのかな？

……。ん？逃げた？

「って何逃げてんだアアアアアア！」

何あいつ逃げてんの！？ここまで引つ張つといて！？？どういう根  
性してんだ、あいつ！絶対追つて殺やつてやる！

そう思つて、ヒグマを追跡しようとしたら、師匠に「やめとけ。  
といわれ羽交い絞めにされた。」

「何するんですか師匠！？」

何を考えているんだ師匠は！？あんなふうにバカにされても平気  
なのか！？

すると、師匠はやれやれといった感じで口を開いた。

「落ち着いてよく考えてみる。あの状況で逃げることができるの  
は、近くに軍隊がいるからだ。あいつを追ってみる。軍隊と戦うこ  
とになるんだぞ」

「う……」

よく考えたらそうだ。あんな状況で逃げれるということは、何か策があるに違いない。師匠のいう通りだ。けど、

「 けど、あんな奴に負けたのが悔しい……」

あんな、へらへらとした奴に負けるなんて、穴の中に入りたいくらい恥ずかしい。

師匠は、「まあ、確かにな。」と同情してくれた。そして、しばらくおいて俺に言う。

「あんな変な奴に負けるのは嫌だろう。でもな、負けたのはお前の力不足だ。相手は10年以上鍛えている。でもお前はどうか。たったの3年間だ。それに相手は国軍中將。力と経験の違いは明らかだ。それでも、お前があいつに勝ちたいのなら、方法は一つ。……もっとう修行に励め」

確かにその通りだ。あの時、俺は何も手を出せなかった。力の差は明らかだ。しかしその差はきつと、俺の努力しだいで、うめることができるだろう。

よし、今度から修業を一生懸命に頑張ろう。この悔しさをばねにして……。

「さてと、ご飯の件についてだが」

突然、師匠がそんなことを口に出した。あっ！すっかり忘れてた！何肝心な事を忘れてんだ、俺！

そして、今ようやく思い出した俺が耳を傾けるのを待たずに、師匠は言葉を紡ぐ。

「 やっぱ、なしということで。」

「 …… は？何言ってるの、この人？」

「 ちょ、ちよつと、それはひどいんじゃないですか!？」

頑張って熊と戦ってきたのに何言ってるんだ師匠!?! しかも国軍中  
将とも戦ったんだぞ!?! 人の努力を何だと思ってるんだ!?!

「 おいおい、甘えるんじゃないぞ。俺は何をしると言った? 」

「 熊を一体倒すだけで十分だと言っていたじゃないですか!?! 」

「 …… お前の耳の構造はどうなってるんだ …… 」

俺と師匠はそんなやりとりをしながら、森の中を歩いて行った。

第9話 龍青、一件落着（後書き）

次はシツモンコーナーです。

第10話 4年後

く その頃、国軍の陣にて く

『ただ今戻ってきました。総大将』

『おう。ご苦労だったな、ヒグマ。どうだった』

『・・・結局、見つかりませんでした』

『そうか・・・』

『申し訳ございません』

『別にいいぞ。また今度探せばいいことだからな。・・・ん？その手はどうした』

『え・・・あ、いえ、何ともありません。ところで、だいたいこの近辺にあることはわかりました』

『ほう。で、なんでわかった？』

『・・・あの人に会いました。あの、影の使い手に・・・』

『あいつか・・・』

『はい。それに、弟子もいました』

『弟子か・・・ あいつが弟子を持つとは思えないが・・・。まさか』

『・・・総大将？』

『・・・いや、何でもなし。もう下がっていいぞ』

『はい』

『・・・あの時以来か。龍影りゅうえい・・・』

龍青サイド

「あんな時もあったなあ」

寮の部屋で4年前のことを思い出していた、12歳の俺、龍青は、ついに武術団に入団できるようになった。あれから4年。月日がたつのはこんなに早いと感じるのは初めてだ。

俺の部屋は約6畳（和室）。世間では中学生と扱われる年にしては、少々広めなのかもしれない。

「修行も頑張ってきたし、大丈夫だ」

俺が入る武術団は、12歳からしか入団できない。そこでは勉強もするし、自分が使う業の練習もする。ちなみに男女別だ。

外で、薄桃色の花びらが舞っていて、窓から入ってくる。桜だ。

「そろそろ行く時間だな」

4月7日、午前8時。集まる時間まであと10分。だが、ここから歩いて約3分。距離は短い。もう少し部屋にいても、普通に間に合う。けど、

「よし、行くこう！」

新しい生活が始まるんだ。新しい仲間に出会えるんだ。そう考えたら、こんなところで待ってはいられない。

見ていてくれ。父さん。俺は、あなたに追いつくよう、頑張りま

す！

そして俺は、希望と夢を心に秘め、武術団の本拠地へと向かった。

第10話 4年後（後書き）

一章完結！！

## 後書きとシツモンコーナー

いやー、やっと終わったよ。1章。これで勉強に励める。・・・  
あ、こんにちは。作者です。やっと1章が完結しました。次から本格的になると思います。ぜひ楽しみにしてください。・・・さっきのつぶやきは気にしないでください。

さてと、じゃあ今からシツモンコーナーに入りたいと思います。  
誰からの質問かって？それは御想像にお任せします。

Q：あの時って何ですか？

作：それはネタばれになるのでやめておきます。一応、10章を過ぎた時くらいにやる予定です。

Q：龍青って、誰の子供ですか？

作：・・・ヒ・ミ・ツ

Q：今後、どんな展開になるのですか？

作：2章のあらすじは教えましょう。あとから。でもそれ以上は言いません。

Q：他にどんな作品があるのですか？

作：えつとですね、この作品の外伝とか、剣道もんとか・・・  
今はそれだけです。でも、やっぱりこの作品が一番長いと思います。

ここら辺で、シツモンコーナーを終わらしておこうと思います。

では、次回一（2章）のあらすじを。

武術団に入った龍青は、男子十番隊（みんな同じ年）に入隊する

ことになる。そこで全員が自己紹介をし終えたとき、同じく入ってきたばかりの女子三番隊（男子十番隊と同年）がいきなり宣戦布告。それには、ある理由があった……。

まあ、ここまでにしておきましょう。楽しみにしておいてください。あと、都合上この章を序章とします。勝手ながら、すみません。知っているかもしれませんが、今日から二、三月まで休載とします。お気に入り登録してくれた方、いつも読んでくださった方、すみません。

頑張つて勉強して、早めに連載を再開することを誓います。だから、首を長くして待っていてください。

龍・作「それではまた!!」「」

って、やっぱり龍青が出てきたよ……。

## 第一話 はじまり（前書き）

あけましておめでとございます。お久しぶりです。三日月の騎士です。

今年はなんと、辰年！というわけで気合を入れていきたいと思つてます。

あ………分かっているとは思っているのですが、三月くらいからまた始めようと思つてますのでよろしく願ひします。

あと、ひとつお願いがあります。

序章の方なんですけど、急いで書いたということもあり、変な文章になっていきますので、今後、書きなおします。

ということ、そこは読まないでくれませんか。今度はおかしくならないようします。

## 第一話 はじまり

四月八日、桜が咲く季節になった。

ここは《東北の背骨》と呼ばれる奥羽山脈おつひんみやまの山の中で、冬は、雪がかなり降るしとても寒い。それに、春も暖かくなるのは四月の終わりごろである。桜が咲くのもその頃だ。しかし、今年は例年よりかなり早く桜が咲いた。その理由は、温暖化が進んでいるからということもあるが、俺はこの国の一部の人々が情熱にあふれていることも理由の一つだと思う。

今、この国の政治家たちは欲と権力にこだわり、政治が乱れている。国の軍隊でさえ、同じことが起こっているのだ。だから、この国にいる能力者は新たな国を建国するために様々な地域で立ち上がっているのである。能力者というのは、一般人とは違い、火や雷などを操ったりする特別な力【業わざ】を持つ人たちのことを指す。そして、その能力者は次第に同じ考えを持った能力者を集めるため、あるいは次の世代の者に【業】の技術や自分たちの考えを教えるために、武術団ぶじゆつだんを結成したのである。

その武術団の中に、東北で最強の勢力を誇る《奥州武術団おつしゆじゆつだん》というのがある。それは俺が今歩いている、奥羽山脈の中にある。俺、龍青りゆうせいは今日、四月八日からそこに所属することになったのだ。

俺の父さんも昔、その武術団に所属していた。父さんは、国の能力者の軍隊、通称《国軍》の中でもかなり強い大将と、互角に戦えるほどの実力を持っていた。しかし、その強さのせい、今から7年前、国の刺客に不意打ちをくらひ、殺された。

だから、俺は父さんの敵かたきを討つことを決意したのだ。そのために、

俺は【業】を磨き、父さんと同じ実力をつけようと思い、この武術団に入ったのだ。

そんなことを考えていたら、不意に強い風が吹き、桜の花びらが俺の視界を隠した。そして、少し時がたち視界が元に戻った時、大木よりも大きな門が立ちそびえていた。そう、ここが《奥州武術団》の入り口である門、通称《鬼首門》おにくつぐのもんである。この門を通ったら、新しい生活、そして修行の幕を開けることになると考えたら、胸が高鳴った。

「さあ、行こうか」

俺は、胸の鼓動を抑えながら門に向かう。緊張しているせいか、足におもりをつけているかのように思い道理には動かない。しかし、俺は少しずつ動かす。門をくぐり抜けるまであと少し。俺は少しずつ進む。あと一歩、もう一歩だ！

俺は苦労しながらも門をくぐり抜けることができた。そして、正面には幅が五十メートル近く、いや、それ以上ありそうな通りが広がっていた。その二百メートルくらい先の右手には、広大な森が茂っていた。そう、その森の中に俺の修行の場、《奥州武術団》の本部があるのだ。

俺は、そこに向かって進む。門をくぐり抜ける時と違い、ずいぶん足が軽い。多分、緊張が緩まったからだと思う。

時は経ち、俺は本部に行くため森の中を歩いていた。道に沿って植えられていた桜は、満開に咲き誇っていた。それを見ると、すっかり春になったんだなとしみじみと感じられた。

しばらく歩き続けると、曲がり角にあたった。そこを曲がると、遠くから見ても堂々とその存在をあらわにしている瓦屋根の建物が

目に入った。《奥州武術団》の本拠地だ。

俺は目を閉じる。今までの修行の反省、ここでの修行の決意などをもう一度心に刻み、そして………覚悟を決めた。

「よし、行くぞ！」

それは、俺の新たな人生の幕開けとなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0761t/>

---

龍青の建国記

2012年1月7日12時53分発行